



- 1 門はニコラ・ピュフ。その横の壁画はジェフ・アエロソル。
- 2 クリストフ・ヴァレリー
- 3 クロード・レヴェック
- 4 ムシュー・シャ
- 5 ジェフ・アエロソル
- 6 アガット・ドウ・パイヤンクール
- 7 伊勢谷友介／リバース・プロジェクト
- 8 松井えり菜

No Man's Land

文・藤田千彩 (アートライター)

「アートを見る」ために
私はどこへ行くのだろうか？

「OOトリエンナーレ」などの野外国際展覧会や「アートで町おこし」という趣旨のアートイベントが盛んに行われて久しい。きちんとした美術史としてまだ語られることの少ない、こうしたアートスペース（美術館やギャラリー）以外での展示。昨年秋から今年初めにかけて、日本各地でいくつものアートイベントが開かれた。

例えば「あいちアートの森」。タイトル通り、愛知県内に散らばる広小路、東栄町、常滑、豊田、佐久島といった5会場が開かれたグループショーである。私が見た広小路の東陽倉庫テナントビル（旧トーヨーボウリングセンター）は、開催直前までマンションギャラリーとして使われていた場所だった。30人以上の出品作家はジャンルも幅広く、絵画、立体、インスタレーション、映像といったアートワークが、とてつもなく広いリビングや、おそらくベッドルームやダイニングであったであろう空間に置かれていた。その様は、

ホワイトキューブでの展覧会ではないが、美術館の展示のようだった。というか、美術館でない理由、つまりこの場所でないといけない理由を知りたくなった。

また同じ頃、東京・広尾にあるフランス大使館の旧庁舎でも、アートイベント「No Man's Land」が開かれていた。公式ウェブサイトがきちんと機能していないこのイベントは、おそらくクチコミで評判が広まっていったのだろう。オープニングの日に行ったらお祭り騒ぎ、平日に行っても混んでいてゆっくり展示が見られない。土日に行こうものならディズニーランドのアトラクションを待つように、入り口で行列を覚悟しなければならない。個室に分かれた部屋一つひとつが作家ごとの展示スペースで、暗くして映像やインスタレーションを見せている部屋もあれば、窓からの自然光やスポットライトを当てて絵画や写真を並べている部屋もあった。各部屋や廊下は狭いし、大人数の観客がひしめている。正直こういう状態で鑑賞をするアートイベントに不慣れなため、じっくり作品と向き合うことはできなかった。

とは言え、これだけ多くの作家を集め、会期延長を何度も行いながら内容を変えていくアートイベントも、他に

例を見たことがない。コーディネートの大変さ、フランス国の寛容さを想像するだけでも、頭が下がる。

本来アートを見せる場ではないところで展覧会をする、ということ。主催者側からすれば“開かれたアート”を目的に、いわゆる美術ファン以外（建築ファンや町おこしの人たちなど）をアートに取り込める、と思うのであろう。コマーシャルギャラリーに所属していない作家にとって、美術館での展示は困難であるし、貸画廊文化も軽薄になった今の時代、発表する場所があるだけラッキーなのだろう。そしてアートファンであろうが作家の知り合いであろうが、鑑賞者は足を運び、作品を見ることを強いられる。作品の印象は、光の強弱、スペースの余裕の有無、そういったことだけで変わってしまうことを、どのくらいの鑑賞者がわかっているのだろうか。

ホワイトキューブを絶賛するつもりはない。ただ“つまらない”“わかりにくい”と感想を漏らす前に、今一度「アートを見る場所」を考え直す必要があるのではないかと思うのだ。☺

No Man's Land

会期 2009年11月26日～2010年2月18日
会場 在日フランス大使館旧庁舎
www.ambafrance-jp.org